

Title	吉村先生をしのんで
Author(s)	稲垣, 武
Citation	経済論叢 (1966), 97(2): 244-246
Issue Date	1966-02
URL	http://dx.doi.org/10.14989/133111
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

經濟論叢

第九十七卷 第二號

哀 辭

故吉村達次教授遺影および原稿

国債発行と金融政策	中 谷 実	1
アージリスの組織理論 (1)	田 杉 競	16
貸借対照表という用語の創出過程	高 寺 貞 男	30
独占価格と生産価格	松 石 勝 彦	51

記 事

吉村教授逝く

追悼文 (池上 惇 林 直道 松井 清)

追憶談 (坂寄俊雄 稲垣 武 原田篤己)

故吉村達次教授略歴・著作目録

昭和四十一年二月

京都大學經濟學會

吉村先生をしのんで

稲垣武

吉村先生について、実は教室での思い出というものは、学生ゼミから大学院までずっと先生の顔を見てすごして来たのですが、全然ございません。先生について一番頭にうかぶのは、1つには非常にロマンティックで感傷家である先生と、それから非常にテレヤでブンとふくれたところ、それから非常に道徳家めいたことをおっしゃる先生と、お酒の席で聞きますと若い頃は道楽をなさったそうで、そういうものが入りまじっていて、非常に先生というのはつかみどころがないという感じです。

散歩でもいこうかとおっしゃいますと、そこが先生のロマンスと関係があるということで、結局僕は先生のさしみのつまにされていた……そういうことの非常に多い先生でした。ゼミ歌の「赤トンボ」についても、それは先生のロマンスと関係があるそうです。はっきりとはおっしゃいませんが、私たちに歌わせるのです。それから非常に野次馬根性の多い先生でありまして、火事とか地震とかいったら一ぺんに外へとびだしていかれるのです。台風なんかの場合には、話を聞いたのですが、大阪の環状線にわざわざ乗って被害状況を見てこられたそうです。テレビをよく見ておられますが、その番組と申しますと、西部劇かやくざ物です。またたび物が好きで次郎長外伝とか大前田英五郎とか吉良の仁吉とか僕らの知らないような名前をいっぱい知っておられ、徳川家康とか木下

藤吉郎とかを良く見ておられたわけです。また野球は、大阪にいらっしゃいましたころ、よく行っておられましたが、たいいてい外野席でした。お金の関係もあったのだろうと思います。近鉄ファンで、いつも敗けて、「あいつはアカンアカン」と言っておられました。

そういう感じの先生でした。最近も、去年の秋のことだったと思いますが、同好会の講演がありまして、「最近の不況について」とかいう講演をやっておられた時に——先生の講義は、そういって失礼なのですが、あまり上手ではありません。経済変動論でも、ここに集まれたほど多くの学生が聞いて講義をなさったことはないわけです。そういう意味ではいま得意満面ではないかと思います——、その時のことなのですが、僕が聞いていてハラハラしたことがありました。というのは、非常に考えながらしゃべっておられるのですが、時間はどんどん過ぎていくのです。ところがさっぱり現在の不況のところまで行かないわけです。まだ50年代のところなのです。この調子だと1日かからないと60年が来ないという感じで、僕はあんまりハラハラして出て行きました。そういうことが非常に多い先生でした。そういうわけですから僕らの感じでは、とくに第一印象では先生というのは、失敗談とか、しくじりの非常に多い人だったということです。そういうことがありますので、さきほど申しましたように、さっぱりつかみようのない先生だということに落ちつくのです。

本来ならば、ゼミの優秀な先輩方がいらっしゃいますので、ここで別の方がおしゃべりになった方がよいと思ったのですが、とにかく、僕がここでしゃべらせていただくことになったので、ゆうべ一晩ほとんど寝ずに先生の好きなハイライトを一箱吸って考えました。ところがどうしても要領を得ません。われわれの経験からいって、大学院ゼミの指導ですが——おそらくそれは、学生の人がおしゃべりになるとわかると思うのですが——、大学院ゼミの研究指導でも、全然おやりになりませんでした。僕らはそれをいいことにしてなまけ放題だったわけです。いうならば甘えばなしだったわけです。それで私ごとき不肖の弟子は先生の論文を最後まできっちり読んでいたことがない。始めの方をちょっと読んで、最後の方を見て、先生はこんなことをやっておられるのかと思っていたのです。ところがそれにもかかわらず、なくならなれて見ると、なにが非常に悲しいのです。ちょうど先生がなくなられたころの京都の底冷えのようなものが、ぐうっと下腹にくるのです。それは、お通夜もすんで、せいぜい1週間もすればなおるだろうと思っていたのですが、いまでもやっぱり下腹からぐうっとくるような感じで悲しいのです。

このようなわけで、実際先生の人柄についてはわからないのではないかと思います。もし先生の人柄について総合判断ができるとしますならば、それはおそらく、僕が将来

死ぬような時にやっと、「先生のいうことがわかった」ということになるだろうと今から思っています。すくなくともそういう意味では、おそらくあと10年くらいたたないと先生のお気持だとか人柄だとかを総合判断できないと思います。

とにかく、いまの段階での結論を出しておかないといけないということですから、先生にわるいのですが、批評させていただきますと、先生は非常にたちの悪い、根性の悪い、ほんとうに根性の悪いいたずらばかり一生かかってやってきた方だ、一生そういうことをやってきて、僕らも周囲の人も含めて、要するに人をおちよくりまわしてこられた、そしておちよくりながらその人の人柄というか、あるいはその人の人となりというそういったものを、ずっと最後の最後まで、いうならば息が切れて——われわれは人口呼吸をいたしました——、瞳孔があいてしまったその段階までも、きっと試してこられたと思うのです。こういう風に考えますと、結論は、おのずからここから出て来ると思うのです。それは先生の言葉で言わせてもらえばおそらくこうなると思うのです。言葉はすこし荒くなるのですが、「おまえら一生ばか正直に誠実に生きるこっちゃ。名誉欲や変な色気なんか出したらあかんぞ」と。おそらく先生が言いたかったことは、そういうことだったと思います。

いま思い出してみますと、この点について、私も先生から言われたことがあるのです。こんなことはめずらしいのですが、そのときの状況を思い出しますと、眼がねごしに細い目を余計細くして、僕の顔をじろっと見て「稲垣、おまえ、どない思とるんや」と言われて、居すくめるような目でぎゅうと僕の眼をにらまれたのです。僕はおどおどして、「はあ、僕は年中、左向いたり右向いたりしていすねん」と、こういいました。そうすると、先生はえらく気嫌が変って、大声で「よっしゃ、それでええのや」と言われ、大きくうなづかれました。僕としてはもうそれだけで、もって銘すべしだと思っています。ありがとうございました。